

報告2 井川城跡の発掘—見えてきた？小笠原氏の居館—

熊谷 博志（松本市教育委員会）

1 調査の概要

- (1) 所在地 松本市井川城1丁目
- (2) 目的 井川城の範囲と内容を確認するための学術調査
- (3) 期間 平成25年6月17日～継続中
- (4) 対象面積 約8300㎡

2 井川城の概要

井川城跡は、信濃守護小笠原貞宗が構えた「井河の城（館）」の推定地で、建武年間（1330年代）に松尾（現在の飯田市）から館が移されたと言われています。

戦国時代になり、「林の館」（里山辺の林城付近）に本拠を移すまで100年以上にわたり信濃の政治の中心だった、松本城の前史を飾る重要な遺跡です。

松本市では、昭和42年に櫓（やぐら）跡と伝えられる塚を特別史跡に指定していますが、今回初めて遺構確認のための本格的な発掘調査を実施しました。

井川城に関する記述は『信府統記』（資料1）や『諏訪御符礼之古書』（資料2）があります。これにより、小笠原氏が林城や深志城を築く以前に堀に囲まれた居館を構えていたことは辿れますが、文献に記された「井川城」と、今回の発掘調査で明らかになった遺構が同一のものであるのかは、慎重に検討する必要があります。

3 調査の成果

今回の調査では以下のことが明らかになりました。

- (1) 館推定範囲内は湿地の中の小高い場所に、厚さ1m程の盛土を広範囲に行っている。
→ このことから、大規模な労働力を用いて造成工事を行うことができた有力者がいたことがわかります。
- (2) 盛土は、切岸（堀に接する斜面）から5～6mの範囲に良質な粘土を使用している。
→ この盛土の断面と、堀（水路）に沿って分布する特徴から、館の外周に土塁が巡っていた可能性も考えられます。
- (3) 門跡の可能性のある礎石を確認。
→ 門の礎石だとすると、『信府統記』に「東の方に虎口（入口）の跡がある」という記述に当てはまり、「井川城」の存在を裏付ける有力な発見になります。

- (4) 居館の周りには水路が巡っている（中世では「堀」は水路をさす言葉でもあったようです）。

→ 『信府統記』では「四方に流れあり」と記され、『諏訪御符礼之古書』では、応仁元年（1467年）に井川の堀に神灰が撒かれたことが記されています。

- (5) 水路の堆積物からサイカチの花粉が大量に見つかった。

→ サイカチはマメ科の落葉樹で、幹には鋭いトゲが生えています。現代でも垣根に用いられることがあり、敵の侵入を防ぐために周囲に植えられていた可能性があります。お城の堀からサイカチの花粉が見つかったのは、江戸城、忍城おしじょうに次ぐ3例目ということで、中世のお城の研究や当時の景観を知る貴重成果となりました。

- (6) 堀の東側は湿地を粘土で埋める造成工事を行っていて、礎石建物や様々な遺構を造っている。

→ 館の推定範囲内と同じ15世紀の土器や陶磁器が出土するため、周辺には、武家屋敷や城下町等の遺跡が広がっている可能性があります。

4 井川城から林城への転換

小笠原氏が林城に館を移した時期は1460年頃や1490年頃と言われており、明確ではありませんが、発掘調査で出土した土器や陶磁器の年代から推測すると、井川城と林城は一時期併存していた可能性があります。

今回の調査で出土した土器や陶磁器は15世紀代のものを中心とし、15世紀末から16世紀初頭に位置づけられるものが少量出土しています。林山腰遺跡では礎石建物の下から15世紀末から16世紀初頭に位置づけられる陶磁器がまとまって出土しているため、林城の古い段階は井川城の終焉時期と重なると考えられます。

5 今後の課題

今回の調査により、15世紀に大規模な造成が行われていたことがわかりましたが、信濃守護の館と決定づける建物跡や遺物は確認できていません。また、櫓跡と伝えられる塚の性格も明らかではありません。館の内側だけでなく、外側にも広がる遺構が何なのかも含めて、今後慎重に検討していかなければなりません。

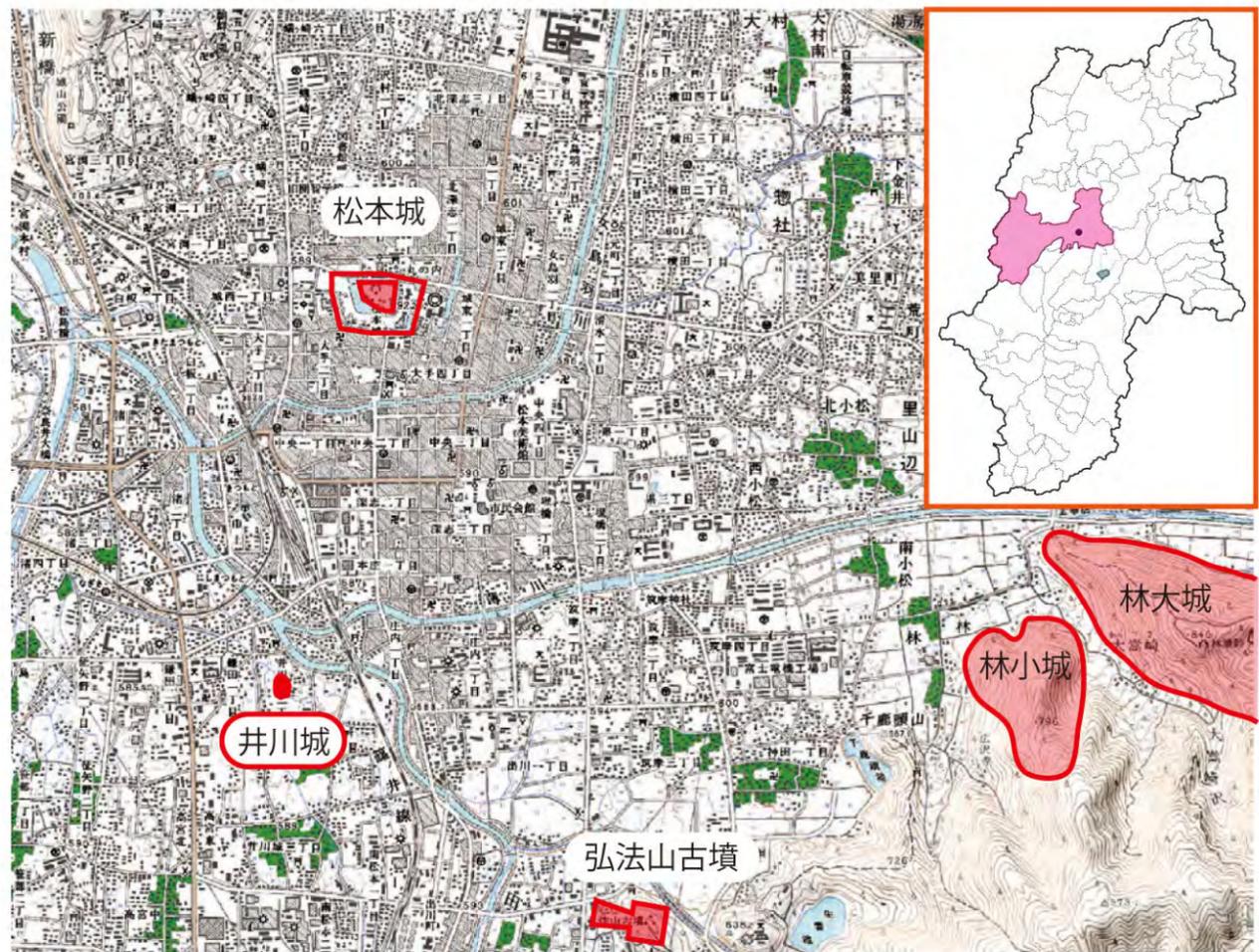


図1 井川城の位置とその周辺（縮尺不定）



写真1 井川城航空写真（左が北）



図2 調査区の位置と概要

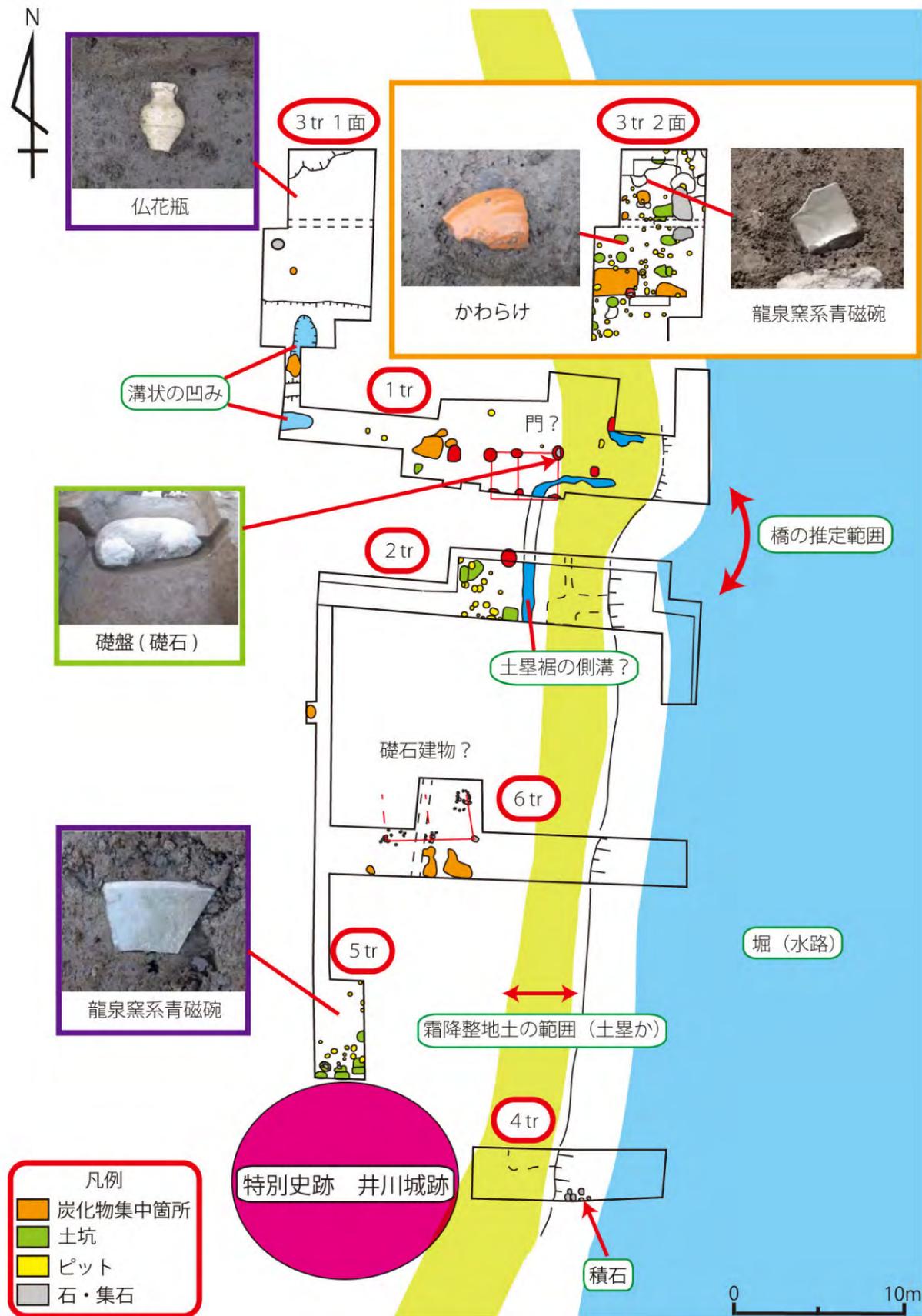


図3 井川城跡1次調査の遺構と遺物



石は川に面した所にだけ並べられていた可能性があります。護岸のようなものでしょうか。



写真5 4tr 土層断面

盛土の堆積は塚の方に向かって傾いています。

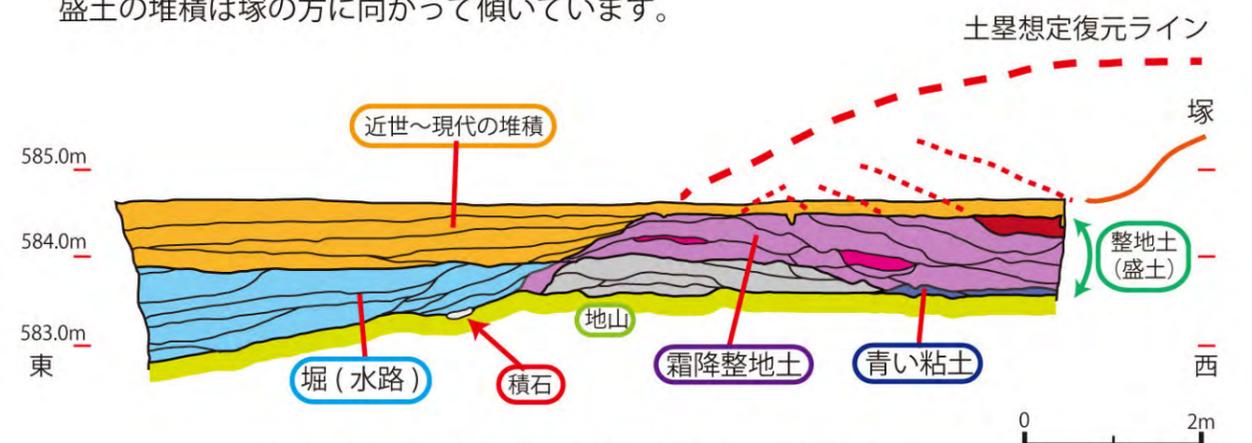


図4 1次調査4トレンチ断面図(塚の東側)

『信府統記』

松本藩主の命により編纂、享保九年（1724）に完成

松本ノ城此地信州府中ニ、所ノ名ヲ庄内ト云フ、古此辺ヲ深志トモ又深瀬トモ称ヘ来レリ。
当郡ハ中古小笠原氏ノ領地タリシ故、彼ノ幕下ノ氏族タル人、所々分ケテ領シテ、或ハ古城ト跡ニ奇リ、亦ハ新ニ城ヲ築キ、屋舗ヲ構ヘテ住居ス、其中ニ島立右近 本氏広野 ト云フ人、始メ八庄内ノ地小島村并河ノ城ニ住シテ、後城ヲ今ノ松本ノ地ニ移セリ、此并河ノ城ハ外シホウニ流アリテ、并ノ字ノ如クナル故ニ并河ノ城ト云フ、古ハ誰シ人ノ築ケルト云コトヲ知ラス、久シク小笠原家ニ持来レル処ニ、城主中絶シテ城郭廢壊セリ、寛正六乙酉年再ビコレヲ修葺シテ、改メ名ケテ深志ノ城ト云フ、此辺ハ小笠原家ノ領地ナルカ、故ニ文龜年中マテハ、林ノ城主ヨリ兼テ持テリ、島立右近モ小笠原ノ一家タリシトナリ

一小島村古城地并河ノ城ト稱ス、沼城ナリ。
本城地形少高シ、広サ東西四十間程、南北五十六七間、東ノ方二虎口ノ跡一所アリ、其涯今ハ蕪地ニテ、草生水ツキナリ、本城ノ内皆畑ニ成リタリ、土手形・矢倉台ノ跡ト見ユル所、塚ノ如クナリテアリ、四方沼ニテ流レモアリ、其内ニ取分深キ所ヲ釜ト云フ、辰巳ノ隅ニ黒田釜ト云フアリ、其所ヘ南東ヨリ流ルルヲ鑑取リト云伝フ、所出アルニヤ、惣テ此地ノ流レ水上アル川ニ非ス、皆近辺ノ出水ナリ、西ノ方ノ川是ヲテ川ト云フ、出水故号セルナルベシ、幅六七間入故、義ルコトナラス、此川ト本城ノ間南ニテハ七八間ノ所モアリ、北ニテハ七八間バカリアル所モアリ、皆田ニ成セリ、川ノ向フ西ノ方ニ鎌田村アリ、是ヨリ西南五六町ハカリニ征矢野村アリ、此北ノ方マテ三ノ曲輪ニテ、今ニ堀ノ跡アリ、今ノ鎌田村ハ曲輪ノ内ナリシト云フ、此城辺ノ水皆北ヘ流レテ薄川・田川ヘ落ル、本城ノ地形モ南高シ、凡テ此近所ノ田ハ深田ノ足入多シ、小笠原家ヨリ久シク在城アリテ、林ノ館ヘ移ラレシ後マテモ兼持テリ、永正元年島立右近城ヲ松本ノ地ヘ引移セル事、委ク城主記ニ載ル、島立モ小笠原ノ支族ナリ、其後ハ坂西氏何某領セリ、小島村ヨリ成安ノ方二町二十間アリ、上小島村ハ松本ノ城ヨリ午ノ方八町二十間アリ、

『信濃史料』 第八巻、昭和三十二年発行

「諏訪御符礼之古書」

応仁元年に、飯田の小笠原政秀が松本へ攻め込んだ。この時政秀に味方した深志の坂西を井川の小笠原清宗が攻めた。深志には諏訪神社の御頭が当たっていたので、榊が立てられていたが、これを清宗の家来の征矢野源四郎が切つて神罰にあたった。諏訪の神長守矢氏が切られた榊に神灰をそえて井川堀に撒いた。

七月六日 甲子朔

十五日、小笠原政員、伊那郡伊賀良ヨリ筑摩郡府中ニ入り、小笠原宗清ヲ攻ム、

〔諏訪御符禮之古書〕○諏訪郡守野野 守矢長守氏所藏

應仁二年花會

去年七月十五日ヨリ小笠原兵助政員、伊賀良ヨリ府中に乱入、同小笠原信濃守宗清ヲ破責候、深志坂西兵部少輔ハ政員方屬手ニ、信濃守宗清御符立榊在所に指寄、御符ヲ切折候者、若字征矢野源四郎、其太刀打之場所ニテ右手ヲ切折、兩人共死去候、外見外聞ノ衆人消肝卷言候、此日ヨリ信濃守家裏者ハ、筑摩國之事ハ當社ヲ尊ト信シ申、可致弓矢之候、如此願慮ニ背給上者、難行末清敷不存候、彼切折申候御符ニ願ヒイナリト云フ、神長守河堀ヘ給マテ候、○井川堀ノ御符ニ載ル

〔深志 應仁二年花會〕
(宗清) 去年七月十五日ヨリ小笠原兵助政員、伊賀良ヨリ府中へ乱入し、同小笠原信濃守宗清を破責候、深志の坂西兵部少輔は政員が手に属す、信濃守、深志御頭御符立に指寄候所に指寄、御符を切り折り候者、若字征矢野源四郎、其太刀打之場所ニテ右手ヲ切折、兩人共死去候、外見外聞ノ衆人消肝卷言候、此日ヨリ信濃守家裏者ハ、筑摩國之事ハ當社ヲ尊ト信シ申、可致弓矢之候、如此願慮ニ背給上者、難行末清敷不存候、彼切折申候御符ニ願ヒイナリト云フ、神長守河堀ヘ給マテ候、○井川堀ノ御符ニ載ル

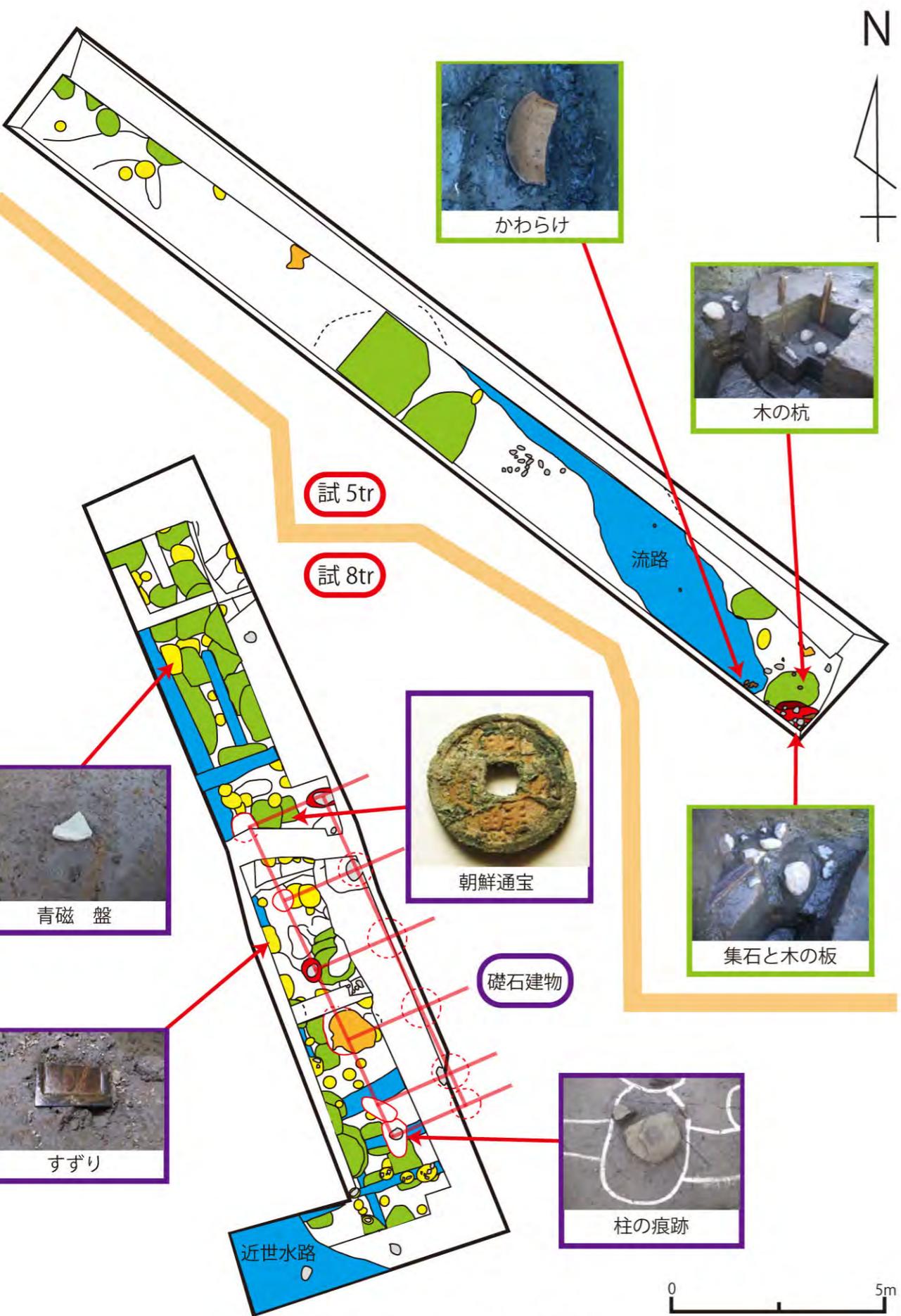


図5 試掘 5・8 トレンチの遺構・遺物



図6 林城跡と林山腰遺跡位置図



写真6 林山腰遺跡 A区西面石垣



写真7 林山腰遺跡 E区礎石建物3と土坑5



写真8 林山腰遺跡 E区土坑5遺物出土状況



図7 林小城跡測量図(縮尺2500分の1)

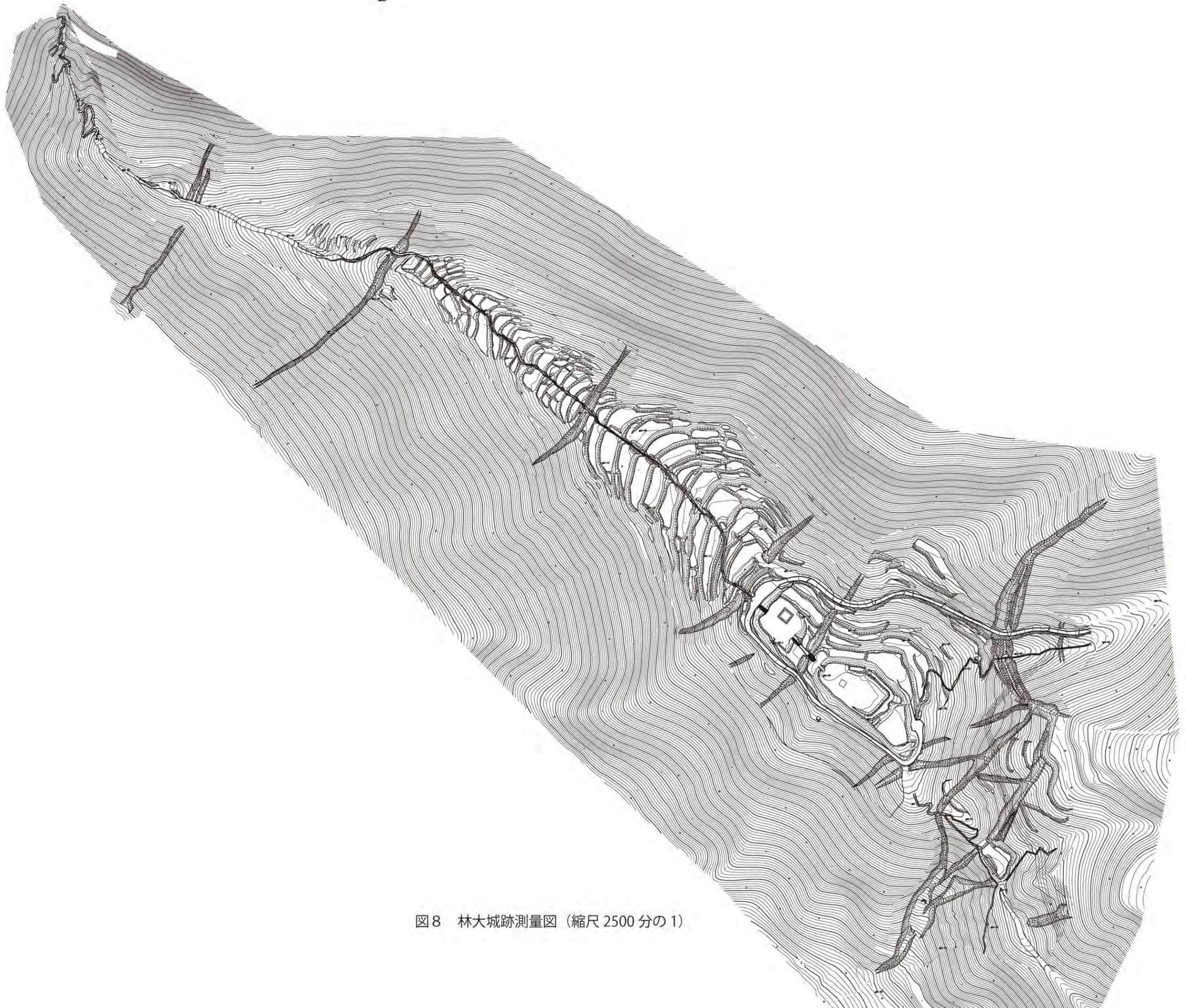


図8 林大城跡測量図（縮尺 2500 分の 1）